
ブッカケマスター・ヤマト

やんだやんたろう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブッカケマスター・ヤマト

【NZコード】

N6412V

【作者名】

やんだやんたろう

【あらすじ】

フィギュア。それは人を狂わせる、魔性の人形。ブッカケ。それはフィギュアに対する愛か、欲情か。そしてここに、ブッカケの道を往く、修羅達。人は彼らを、『ブッカケマスター』と呼んだ。　　イグニッシュョンドライブ、チャージ。

pixivでもやつてます。あしからず。

第1章「ブツカケのはじまり」

プロローグ

その日、私、相沢瞳あいざわひとみは大学の研究室でインターネットで自分の趣味について検索していました。

可愛らしいお人形さん達の画像が画面一杯に開いています。そう。私の趣味は、人形（球体関節人形）。フィギュアと呼ばれる類の物も嫌いではありませんが、なんだか、俗に言つ、『オタク』っぽい感じが否めないので、ちょっと苦手です。

私が好きなのは、やはり、さらさらのロングヘアに、フリフリのドレス。

いつもならば、このように画像を検索して、

「ああ、可愛い」

……と、なる筈だったのです。が、

「酷ひどい……」

見ればインターネットのブログに無残な……お人形さん達（フィギュアとかでは無く、俗にドールと呼ばれる類の物）の画像が曝されていました。

無残……つ、つまり、その……男性の……肉体から放たれる白い液体が、お人形さん達のさらさらだっただらう髪を、べたべたさせ、可愛らしい服をぐちゃぐちゃにしていたのです。所謂……『ふ

つかけ』と言つ奴ですね。

正直……余り良い気分ではありません。

「お人形さん達に、こんなのかけるなんて……最低だよ……」

最低です。お人形さんは、毎日丁寧に磨いて、愛でて、愛する物です！

いつも言つた……その……変態的な行為は、許されないので…！

と、丁度そのように私が右往左往していた頃合いに、研究室の扉が開いたかと思いますと、真っ黒なジャケットを着込んだ一人の男子がやって参りました。

彼の名前は、かみじろ 神代 やまと 大和君。

黒髪の短髪、切れ長の目。一見すると無骨で、無表情な彼ですが、クールで、きびきびとした動作は、女性なら憧れないはずが無いでしょう。

所謂イケメンと言う奴なのです。

と、彼は部屋に入つてくるなり、私の開いているPCの画面に目を向けたかと思えば、近づいて来るではありませんか。

そして画面に映るドール達の哀れな姿を感慨深そうに見つめているではありませんか。

ああ、そう言えば大和君も以前、私と同じようにドールが好きなのだと語つておりました。クールな印象を持つ彼にしては珍しい趣

味でしたので、よく覚えています。

「酷いよね。ぶつかけなんて……大和君もそつ思ひよね？」

私は大和君の方を見て、そう言いました。

ドールが好きな人間ならば、分かつてくれる。確信があったのです。

「ああ……」Jさんは 酷いな……」

ほりやつぱり。

顔を右手で覆い隠し、呻くよつに呟く彼の姿は、そりやあもつ、心の底からドールを愛する人間そのものです。

「大和君……」

閑話休題。

大学四年生ともなれば、特にこれと言つて授業もない訳です。アルバイトなどしていなければ、暇、暇、暇の繰り返しです。

私と大和君もそういう状態として、所属する研究室の教授のお話に耳を傾ける事ぐらいが日課となつているのでしょうか。

幸い、アパレルメーカーへの就職が決まっている私は、本当にそれぐらいしかやることがなかつたり……。

「世界各地で王族などに愛玩された物から、一般庶民の元で祭事や儀礼など多岐に渡つて使用されてきた人形……。民俗学において、人形と言う物はとても興味深いテーマだと私は思う訳だ」

研究室の中央にある、ホワイトボードに張り付けられた、多種多様な人形。それを指さしながら、御年56歳になる教授が、対面に座る私達に向かって軽い講義を始めていました。

私達の研究テーマは、ズバリ、『人形に見いだす民族性』シビれます。

最も、聞き手は私と大和君だけですが、教授のお話は毎回毎回になります。何故私達しかこの研究室に居ないのか不思議な位です。

「教授。今日の球体関節人形やフイギュアと言つた物にもその民族性と言うのは読み取れるのでしょうか？」

と、そんな時に大和君が手を上げてそんな質問をし始めました。

「神代君の研究テーマはそれだつたね」

「はい。いざれこのフィギュアと呼ばれるジャンルにも、ある種の民族性があるのか、否か」

「神代君はどう考えているのかな？」

「勿論、有です。その本質が人形であるのならば、それが例え如何様な存在であるとしても、法則性が確かに存在するのだと仮説づけている次第です」

格好いい。格好いいです大和君。

「そうだね。私も概ね同意だよ。現代においてこそ低俗などと言わ

れる物であるかもしけんが、その本質にはなんら変わりが無い」

「はい」

そんな風に教授と語り合つ大和君の姿に、私は終始見とれていたのでした。

「あれ？ 大和君？ もう帰るの？」

教授との会話を終え、暫くすると、大和君は、やっぱりいつものよう¹に帰宅の準備を始めました。一体何の予定があるのか、私にはよく分かりません。もしかすると就職活動でもしているのではない²かと思っていたのですが、どうにもそういうわけではなさそうです。

それについての疑問を、私は、そのまま聞いてみようと思つたのです。

「ああ。些³か予定があるのでな」

「予定つて言つと…… フイギュアを買いに行つたりとかかな？」

「まあ、そうだな」

フイギュアを買いに行く。

大和君がどういったフイギュアに興味を持っているのか、私も興味があります。

「あ、あの……一緒に買いに行くとか……駄目……かな？」

ゆ、勇気を振り絞りました！

あ、で、でもこれ、もしオーケーされたら、ででデータとかそういう……。あ、いえそういうのはちょっと、いやそういう関係じゃないし……。

そう。遊びに行くだけなのです。

「すまない。仕事の一環なんだ」

「お、お仕事……？」

あ、アルバイトとか、かな?

「そういう訳だ。じゃあ」

「あっ、大和く……」

しかし、既に彼の姿はそこに無く。私の疑問は宙を舞います。

ああ、大和君。

あなたは一体、何者なのですか……？

ブッカケマスター・ヤマト
第1章「ブッカケの始まり」

秋葉原の近くにある、5階建てのマンション。

そのワンルームの一室　即ち俺の自室。大学からの帰り道に『レディオ館』で購入した買い物袋をぶら下げて帰宅する。

ワンルームの居住空間には、テレビ、ベッド、オーディオセット、PCが並べられていて、8畳間ながら、あらゆる生活に関連する物がこじんまりと一纏めにしている。

「帰ったか」

そんな俺に向かつて、女の声が浴びせられた。

ベッドにだらりとうつぶせの状態で、ハードカバーの本をパラパラと捲っている、この少女こそが、その声の主だ。

「ああ」

ブロンドの長い髪の毛に、フリルのついたカチューシャ。そしてそれに似合つようになに印象づけられる、'ゴシックロリータ'のドレスは、白一色を基調としてまとめ上げられている。

胸は無い。まな板並だ。

身長は低い。小学生と言つても通用するだろう。

だが、その最大の特徴は、なんと言つてもその顔だ。

人間離れしたその左右対称にバーツが取り付けられたかのようなそれは、見る物にとつては、恐怖の象徴となるやもしれぬ。

そんな事を考えながら、俺はベッドの対岸の椅子に腰掛け、買い物袋から取り出した箱を机の上に置いた。

「ほう。お前好みのフィギュアだな。中々出来が良い。造形師も、作業師も中々だ。

量産品でこれとは。馬鹿に出来ないな」

ちらりとベッドを一瞥すると、少女が机の上に置いた箱を見ていた。

箱のパッケージには、「イスカリテの涙・ミナキ 1／72」と書かれている。

「イスカリテの涙」とは、前シリーズに放送されていたアニメで、俺が最も気に入つてた物の一つだ。ついでにミナキと言うのはそのアニメで一番人気の高かつたヒロインで、このフィギュアは待望されていた最初の商品と言う訳だ。

「そうだな。俺達の商売もあがつたりだよ」

俺は机の脇に置かれてるコレクションケースへと視線を移す。ガラス製のケースの中には、大小様々なフィギュアやら、ドールやらがきつちりと整列していた。
その中には無論、俺が制作した物も含まれている。

「今回の趣向はどうするのだ？ 魔改造は？」

「いや。魔改造はしない。こいつの基本スペックを試させて貰う」

「ほう。珍しいな」

魔改造とは、要するにフィギュアを改造する事だ。簡単に例を挙げると、パテで胸を大きくしたりとか、そんな所か。

普段なら俺はそうするのだが、今回はあえてその考えを棄てる。基本スペックを知らずして、方向性の定まらない魔改造は本来持っていた可能性を消してしまった恐れがある。それにこのフィギュアの元々の出来の良さを知りたかった。

さて、ここまで来て、何の話か分からぬ人の為に、軽く説明しよ。

何の基本スペックを試すのか。
何の趣向なのか。

無論、決まっている。

”ブッカケ”、だ。

「行くぞ！イグニッシュョンドライヴ接続行為！！ チャージ！」

外装をパージし、ファギュアの本体、いや裸体を外気へと曝す。机の上に鎮座したそれを見て、高ぶつた感情をかき立てられた俺は、かけ声と同時に、ズボンのチャックを一気にずり下げる、その中から、男性器を掴み取る。

「毎回思つただが、そのかけ声はなんなのだ……」

男性器の先をファギュアへと向けた所で、少女が言つ。全く……余計な茶々をいれおつて。

「ふん。男の子はスタイリッシュに。女の子はエレガントに。これが俺の信条だ」

「ああ。そうかい」

呆れたような声を出す少女を横目に、俺は男性器を右手で覆う。

その先に待つていいナキのフイギュアへと向かって、その右手をゆっくりと上下にじごくのだ。

「上下運動！－ セッション、ワン！ レティ－！」

ブツカケの技。

それは脈々と受け継がれてきた、魂の技。

あらゆる人々が、その情熱を燃やし、産み出してきた、人類の英知の一つ。

「はあああああつ－－！」

上下運動 アクセル・ドライブ。

これは、フィギュアと曰の男性器を一直線上に繋ぐことで、その英知を噛みしめる、技。ヒトが産み出した技術、業の英知の工芸品たる、フィギュアに向かつて、进る欲情を活性化させ、右手を上下に運動させる。

ちなみにセッショナーはそのバリエーションの中でも、最も基本的な物である。

だが、単純な右手によるオナニーとは違い、自らのじごきを、フィギュアに対する欲情について最適化した物であり、その本質は180度違う物だと言えるだろつ。

単純かつ、複雑な技巧。
それがぶつかけの技。

「うつ、ぐああああつ－－！」

進る、イナズマのような感覚が、全身を駆け抜ける。
と、同時に、俺の男性器の先端から放たれる、白き液体が、フィ
ギュアの肉体を淫らなシャワーで染め上げていく。

「ふう……」

賢者タイム ワイズマン・タイム 。

それは心地よい、脱力感と、疲労感。
かつて多くの男達が、求め、手にしてきた、至高の一時。
だが、しかし、

「やはり魔改造が必要か……」

それは俺が求めていた物には、遠く及ばないようだつた……。

そんな事を考えながら、白濁液に染まつたフィギュアをしげしげ
と眺めていると、

「そうだな。お前らの下劣な趣味が私にはさっぱりだよ

などと少女が言つ。

「最高の褒め言葉だ。オリヴィア」

俺は仕返しどばかりに未だいきり立つ股間の一物を少女 オリ
ヴィアへと向けてみる。と、彼女は怪訝な顔でこう切り返した。

「分かった。もういい。だからその一物を早く引っ込める。それと

も今度はその銃口を私に向けるのか?」

「いや。お前に欲情するほど、俺は食えていない」

「そうか」

無論、冗談だ。

俺は一物をパンツの中へとホールダーさせ、チャックを閉め、フィギュアにぶっかけた精液をティッシュで拭つた。

撮影は取りやめにして置いた。こんな物を撮影しても、『彼らは満足しない』。

ミナキのフィギュアをオリヴィアへと向かって差し出してみた所、「汚い物を掴めるか馬鹿!」と罵倒された俺は、仕方なく机の上にそれを放置し、それから台所で手を洗う。

そんな風に手を洗つていると、俺の脳裏に昼間の光景が過ぎる。

同じ研究室の相沢とか言う女が開いていた、フィギュアへのブッカケ行為をシャッターしたブログ……。

そう、あれは間違い無く、

「FBI（フィギュア・ブッカケ・愛好会）、か……」

FBI。

それは、今現在、ネット上で問題化している、フィギュアぶつかけ集団だ。

何故、基本的にオナニー行為の一つである、ぶっかけが問題視されているのか？ 答えは簡単だ。F B Iは店頭のショールームに飾られているフィギュアや、他人の家に潜り込んで、それにぶっかける。

言つてしまえば器物損壊行為を行つてているのだ。

「下劣な変態性欲者の集まりと言つて訳か……」

それ以前に人としてどうなのだろうか。

「いや、お前が言つなよ

自分が言えた義理でも無いが。

「まあな

「なんでそんなニヤリとした顔で言つんだ。褒めてないぞ。全く褒めてない」

と、まあ、そんなオリヴィアとの下らないやりとりもこの辺にしておこう。

俺は机に置かれているデスクトップPCを起動させ、ブラウザを立ち上げると、掲示板サイトの閲覧に映る。

この掲示板サイトは通称、『ぶっかけ板』と言い、俺達ぶっかけに生きる者達が日夜情報交換を行つている場でもある。

話題は、まあ、当然というか、F B Iへの罵倒と、愚痴で埋め尽くされている。

俺達が危惧している事は一つ。

FBIの行為が世間の話題に持ち上がる=ぶつかけそのものの社会的問題視だ。

「放つておく訳にもいかない、か……」

自由にぶつかけが出来なくなることは、俺達にとっては死活問題なのだ。

「放つておけよ。お前らのよつた変態が居なくなれば人形達も安心して暮らせんんだぞ?」

「愚問だな、オリヴィア」

オリヴィアに向かつて、俺は口元を歪める。
そして、一呼吸置いてから、いつ語り出した。

「俺は変態だ。変態だからこそ、ブカッケしたい。その欲望を満たし、霸道を突き進む俺にとって、障害は潰す。それだけだ」

「知るか」

まあ、分からぬなら、それで良いのだが。

翌日。

俺はとある人物と携帯でメールのやりとりをしていた。

『状況は悪い。この間の事件がマスコミにもキャッチされている。

俺達ブツカケマスターもその存在が公になれば、世間は放つておか
ないだろ?』

相手は俺と同じブツカケマスターの一人。

仕事上、何度か顔を合わせた事があるが、何分、住んでいる場所
が離れている為、頻繁に接することが出来ない以上、メールでの会
話になってしまつ。

『なるほどな』

『俺は生憎仕事でこちちらから出ることは出来ない。お前が処理する
んだ』

処理だと?

俺は眉を潜めて、軽く溜息をついた。

『難儀な物だな。他人の為にブツカケをしろだと?』

つまりはそういうことだ。

処理をする、と言つ事はFBTとの戦いを意味する。

『そういう前は嫌いじゃ無い』

相変わらず気持ちの悪い奴だ。

そんな事を考えつつ、俺はメールをそれ以上送らないことにした。

「あ、あのさ……。大和君。もしかして……彼女とメール?」

と、そんな俺の様子を観察していたらしい、相沢がおそるおそる
声をかけてきた。

そういえば、今は大学の研究室だった。

「どうが、何をまごついているのだ。この女は。

「いいや。俺に彼女は居ない。これまでも、そしてこれからも」

「そ、 そ、 う、 な、 ん、 だ、 」

そうなのだ。

俺は人間に興味など持てない。

真性の「ハイギーク愛好者」なのだ

だからこそ、許せない。

他者の物を勝手に穢そうとする、奴ら、FBIを。

「グヒヒヒヒ。エリスたんハアハア……」

悪は、夜にやつてくる。

いたいけな人形 少女に向かつて、性器をいきり立てる、
今にも爆発寸前の”それ”は最大級に膨張を遂げていた。
雄。

「...」

その発射口に向かって、俺は一枚のカードを投げる。

カードは少女の間と発射口の間に盾の役割を果たす。男の欲望を

受け止めたのは、少女ではなく、一枚の紙。

「な、なんだー!?」

「己の欲望を処理するために他者の物を汚すなど、愚の骨頂」

狼狽える男の前に、俺とオリヴィアはよしやくナチスディッシュ風のトレーンチコートを着てこその姿をお披露目してやることにした。

「お、お前は…… めわかー?」

予想通り、その悪は狼狽える。

「ブッカケ、マスター、、、ヤマトー!?

「いかにも。俺が、ブカッケマスターヤマトだ」

ベタベタと汚らわしい何日も風呂に入つていらない様子の男は、一物をしまつことすら忘れる程動搖していた。

見ればそいつのメガネは曇つていて、出っ張った腹の上から羽織つたランニングシャツは汗まみれだった。相当エンジョイしていたらしい。

……ちゅうと悪いことをしたような気もしたが、奴は自分の欲望を吐き出したのだから良いだろ!つ。

「幻の火の道の正當後継者か……!」

ほう。

意外にも知っている物だな。

「なんだヤマト。お前も有名になつたものだな」

オリヴィアの言葉に、俺は顔を右手で覆う。少し恥ずかしい。自負する心が羞恥心を生んだのだ。

ブッカケの道。

それは、火、水、風、土の4つから成る、体系化されたぶつかけの基本思想。

この存在を知らないぶつかけは素人と言つても良い（FBIは素人の集まりだと思っていたのだが、どうやらそうでも無いらしいことが分かる）。

その中の一つ、火の道。

俺はその火の道を学んだ、正統後継者。
たつた一人の、火の道を継ぐ者。

「ふん。しかし貴様とてブッカケによつて欲望を満たす事は変わりが無いだろうに！！」

「ああ。そうだな」

男の言葉に、俺は右手で隠した顔の口元を一いやりと歪ませてみる。

「ならば何故我々に手出しをするーー？」

「気に障るからだ」

「なにい？」

メガネの奥の眉を潜める男に向かって、俺は右手を解き放つ。そして、右手で男の一物を指さして、こう言い放った。

「ブッカケとは、所詮、オナニー。つまる所、自慰行為に他ならぬ。そのオナニーを他者に見せつけるなど、愚の骨頂。仮にもブッカケの道を突き進む者として、その愚かな行為を見過すわけにはいかない」

狼狽え、後ずさりを始める男。

その一瞬を、俺は、逃さない。

「今だ！　ヤマト！…！」

「イグニッシュョン・ドライヴ
接続行為！！　チャージ！…！」

素早く股間のチャックを下ろし、準備行動　イグニッシュョン・ドライヴ　へ移行。

オリヴィアが持ってきたフイギュアを俺の足下にセツトすると同時に、股間の一物の銃口を、呑わせる。

「　アクセルドライブ　・　上下運動　・　セッショングー！」

アクセルドライブ、セッショングー。

右手のみの使用だった上下運動を、両手にすることにより、より繊細な運動のパラメータ調整が可能となる、更なるテクニック。

燃え上がる情熱の炎を柔らかく包み込み、集中させる。

右手のみだった、その時よりも、より柔らかな快感が俺の全身を駆け抜けていく。

「うおおおおおおおおーーーー。」

電撃。

快感の絶頂を、目指して、駆け抜ける。

加速する、両手の動き。

沸き上がる、電撃にも似た快感。

柔らかな柔の快楽と、電撃のような、剛の快楽のせめぎ合へ。

その一つの、戦いにもにた衝動を、俺は両手の動きでコントローラーをしながら、ファイギュアを見つめ続ける。

その柔らかに見える質感。

女の臭いさえ漂つてきそうな、髪の色。
ちらちらと見える、スカートの中身。

駄目だ、限界だ。

「あああーー！ がっ、うおおおおおああッ

電撃が、走る。

ぶつかけを終えたファイギュアをティッシュで磨いてくる。

そんな俺の姿を見ながら、男はへたり込んで、わなわなと蠢いていた。

「うへ、これが……。真なるブッカケ道、……」

薄暗いのによく分からぬが、その床には、涙の雫がこぼれ落ちていろいろらしい事が、分かつた。

しばらくそうしていた男は、やがて、おもむろにメガネを外し、涙を腕で拭つてから、顔を上げる。

「で、弟子にして下せいい……！」

悲痛な叫び声を上げた男に、俺とオリヴィアは、僅かばかりの戸惑いを覚えた。

「どうするのだ？」と言つ顔を向けてくるオリヴィアに対して、俺は首を横に振る。

「俺は弟子は取らん」

火の道は、一子相伝。
みだりに他者に伝えていけないことが、俺と、『師匠』との約束だった。

「な……」

哀しみの表情を顕わにする男に対し、俺達は背を向ける。
ブッカケマスターとして、伝えなくてはならないことが、俺にはあるのだ。この男だけに、それを伝えるだけでは、駄目なのだ。

だが、

「だが、貴様がこれからもブッカケの道を突き進むと嘗つてゐるなら、止めはしない。お前が突き進むその先で、待つてゐる」

この男も、俺も、同じぶっかけに生きる者同士。
いずれ又出会つかもしれない。

だから、その時の為に、俺は、ぶっかけしたフイギュアを、置いていく。

俺からの、餞別だ。

「ヤマトさん……」

そのフイギュアを抱きしめ、男は、静かに、そう言つた。

後日談。

俺は相変わらず机の上でフイギュアを弄つてゐる。オリヴィアも相変わらず、ベッドの上で寝転びながら、何か分厚い本を読んでいた。

付けっぱなしのヤコモニターには、今だその活動を止めないF

B-Iの活動が報告されている。

「ふん……」

俺はその情報を横目に見ながら、ミナキフイギュアの魔改造を終

えた。

胸の増量と、足下のフォルムの変更。髪型の修正、着色の変更。今回は中々の力作だと言えるだろう。

「どうするつもりだ、ヤマト?..」

と、一人悦に漫つていると、オリヴィアが俺の背中に向かって声をかけてくる。

どうするつもりだ、とは、F B Hについてか、この魔改造を終えたフィギュアについてなのか。

「決まつている」

いや、どうりで、”変わらない事”だな。
俺に出来ること、俺がやるべきことは、ただ一つ。

股間のチャックを下ろして、立つこと。

「イグニッショーン・ドライブ—— チャージ——」

第1章「ブッカケのはじまり」（後書き）

イグニッションドライブ、チャージ!!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6412v/>

ブッカケマスター・ヤマト

2011年10月9日13時28分発行